



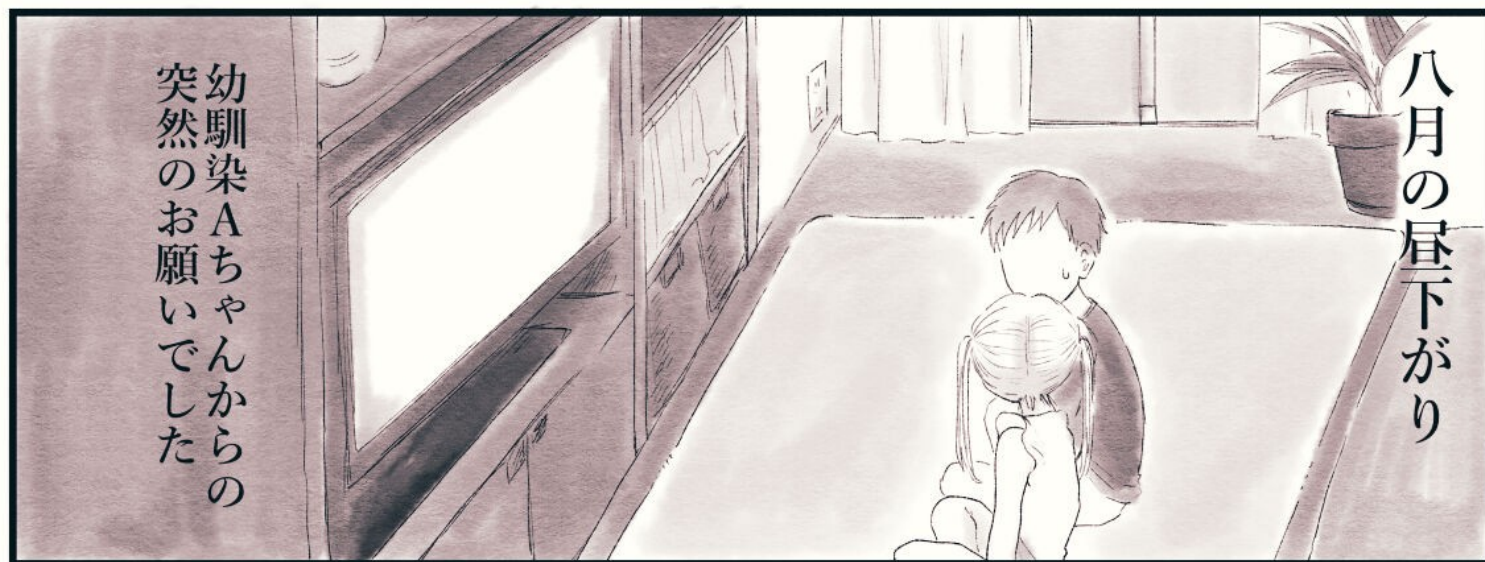
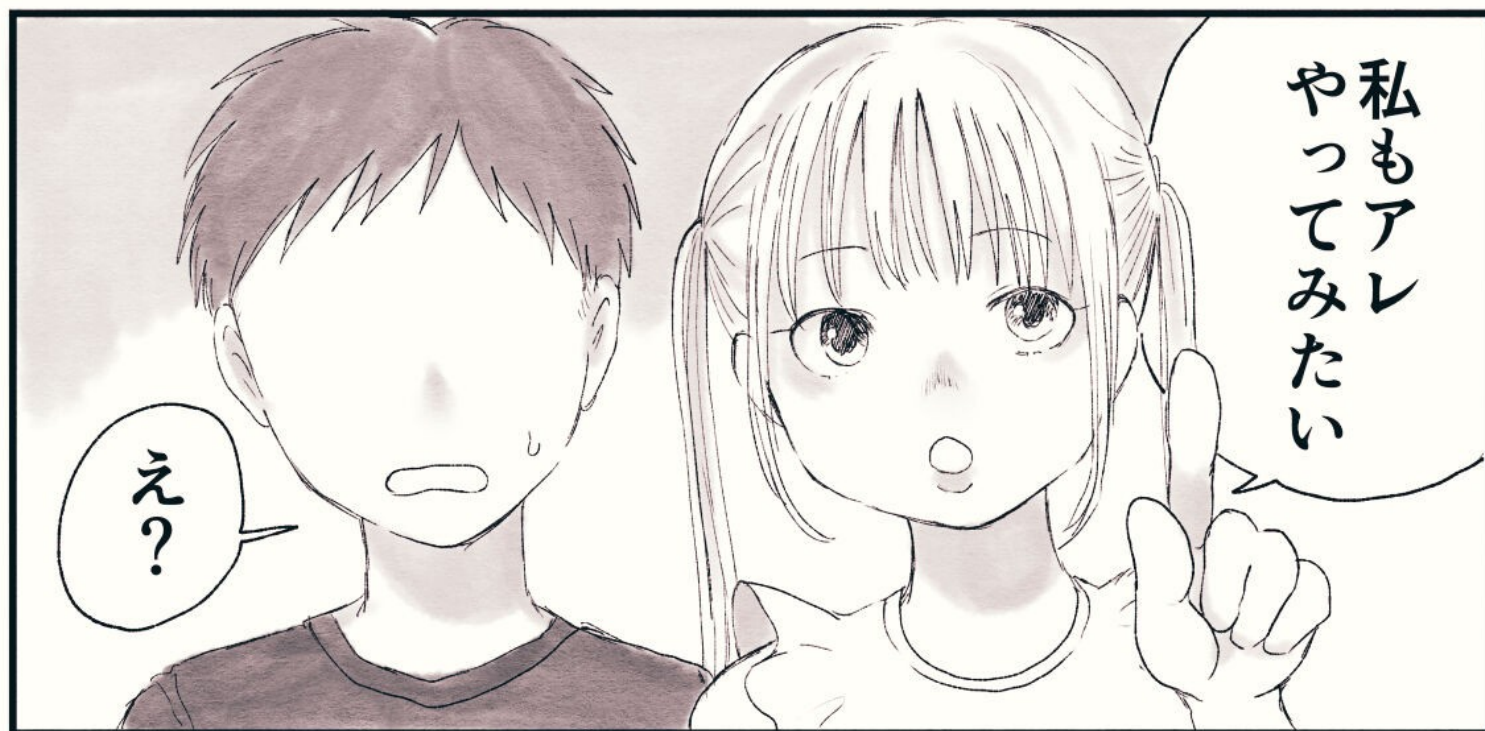
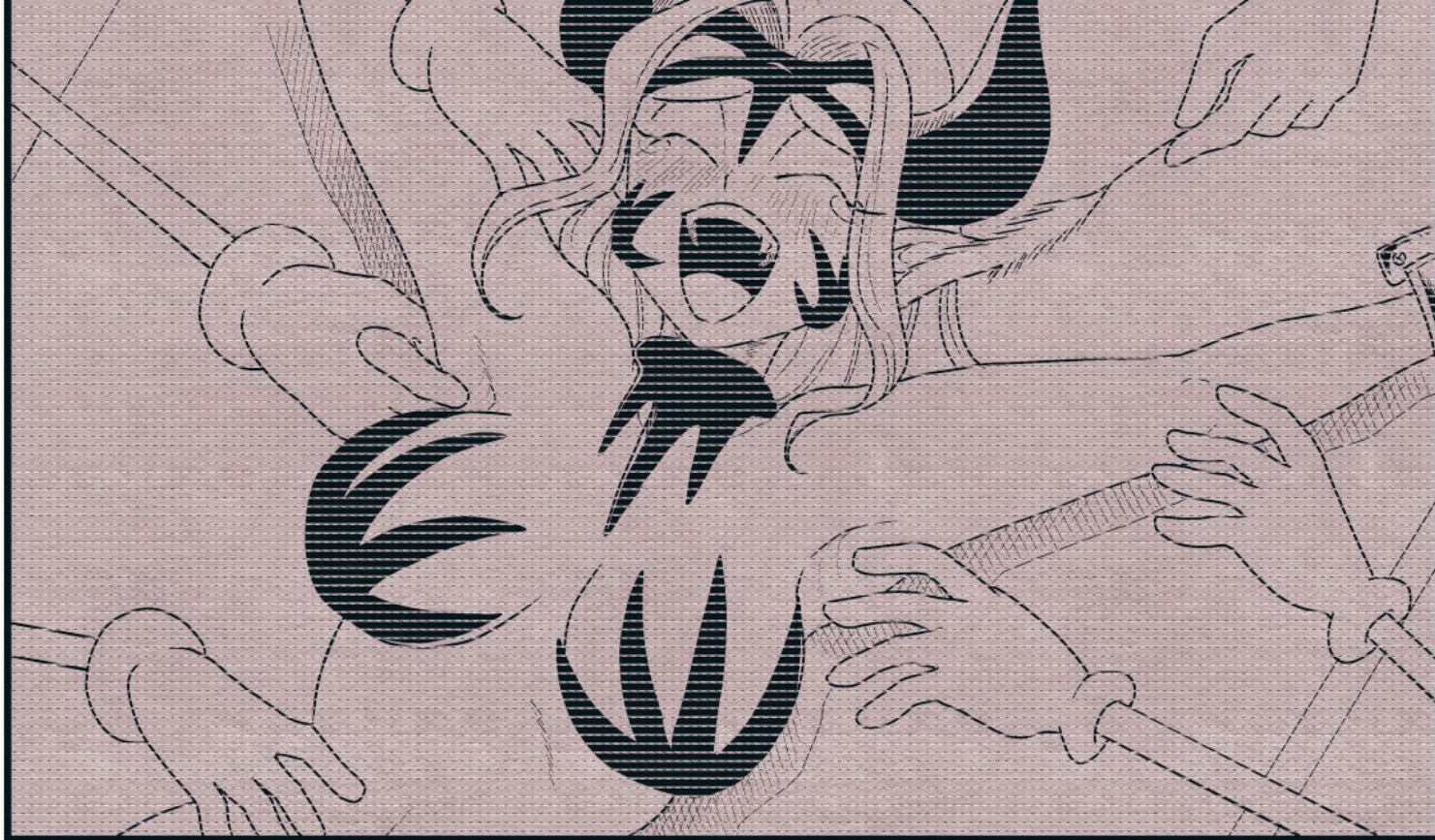
体
験
談

く
す
ぐ
い

おもひで

※この物語はフィクションです。
実際の人物・場所・団体とは一切関係ございません。





Aちゃんは気が強く
男勝りな性格：というより
女王様みたいな雰囲気があつて



男女関係なく
畏れられている存在でした

~~~~ツ  
やめてつて  
言ったら  
やめてよ！



は？何してんの？

あたしがされる側  
あんたがする側

え？

意外でした  
なんせ彼女は  
女王様でしたから…



ここ硬くて  
イヤだから  
あんたの部屋  
行こ

うん…

言われるがまま  
ぼくとAちゃんは  
自室に向かいました



部屋に入るなり  
Aちゃんはベッドの上に  
大の字になりました

何ぼーっと  
してんの

早く  
してよ





手始めにワキ腹を  
くすぐってみました



いくよ…

ギョ…

女の子の上に  
馬乗りになるという  
行為に興奮したのを憶えています



くすぐりたいところと  
言えば足の裏かなあ  
と思い

今度は足の裏を  
くすぐってみました



もっと色んなところ  
くすぐって

くふっ

いいよ



ごめん  
ごめん

くすぐった反射で  
Aちゃんに蹴られました

へーキだから  
続けて?

痛いしこっちは平気じゃない  
…と思いました



キャハハハハハハハハハハ

ゴッ



しかしAちゃんに  
逆らったらどうなるか  
わかりません

足の裏は  
やめて  
上半身を  
中心に責めて  
いくことに  
しました







あはっも

もう  
やめてえ!!



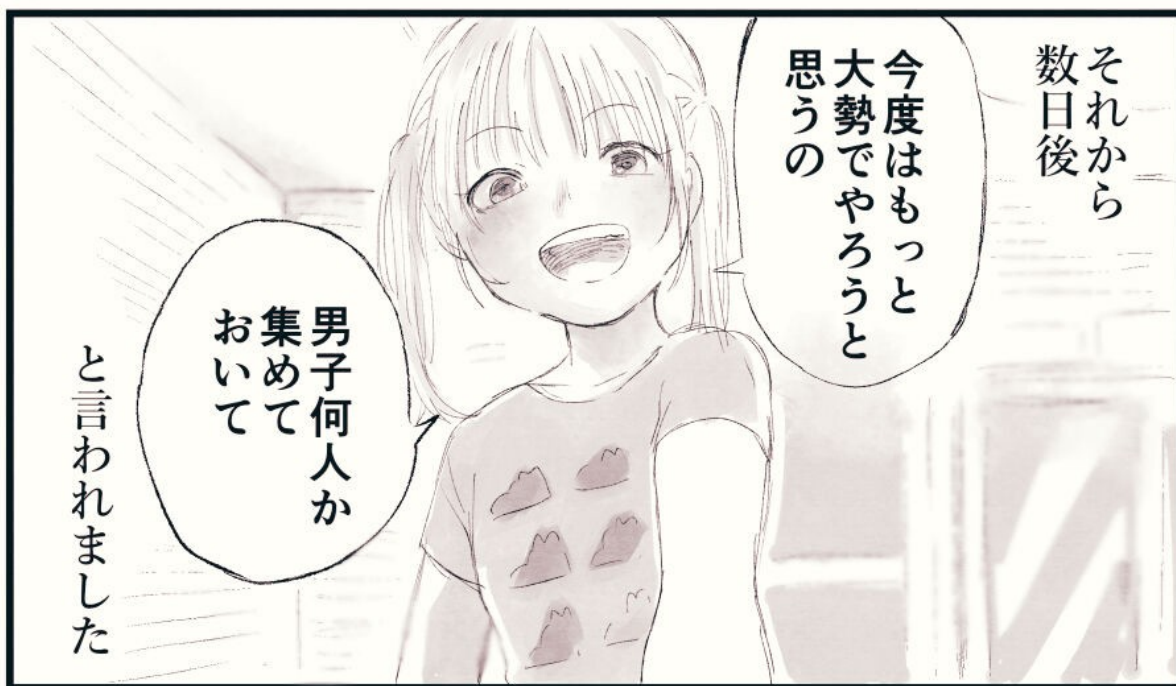
キヤハハハハハハハ



体感一時間程でしょうか  
Aちゃんは  
頬を紅潮させながら

ありがと

と満足そうに  
言いました



それから  
数日後

今度はもっと  
大勢でやろうと  
思うの

男子何人か  
集めて  
おいて

と言われました



すごく色っぽくて  
ドキドキしました



当時 Aちゃんに  
少なからず恋心を  
抱いていた自分  
としては複雑な  
気持ちでした

少し話はズレるのですが  
Aちゃんはこの行為を求める時  
「アレ」や「あの」などぼかした  
言い方をしていたように  
記憶しています

無邪気さを装ってましたが  
何かうしろめたいもの  
だという自覚は  
あったんでしょうね

話は戻り、  
Aちゃんの家には僕を含めた  
男子五人が集められました

私を押さえつけて  
とにかくアレして  
欲しいの

私は捕まった女戦士で  
みんなは敵ね！

…という  
設定でした

今回はAちゃんの家で  
床に座布団を敷いた  
状態でやることにな  
りました

まだ小さいAちゃんの  
身体は座布団二枚で  
ぴったり収まりました



今回はそれぞれに  
役割が  
決められました

腕を抑える役一名

右側担当一名

足を固定する二名

左側担当  
一名

その時のAちゃんの  
期待に満ちた顔は  
今も忘れられません

僕らのくすぐりを  
今か今かと待って  
いるようでした



左側担当の  
Bくんが  
仕掛けました

あハハハ

反射でAちゃんが  
身をよじります

この時僕は  
左足担当だった  
のですが

暴れる足を  
押さえつけるのに  
大変苦労しました

そこからはもう  
皆必死で  
Aちゃんが  
満足するまで  
くすぐりに  
徹しました













右足担当のC君が  
何やらソワソワしだしました

彼は足の付け根…  
ほとんどおま○こに  
近いところを責めて  
いたのです

そこ  
くすぐつ  
たゝい!!

Aちゃんのその言葉は  
催促のように聞こえました

ヒートアップした  
ぼくらはさらに  
過激なことを始めました

あ



至近距離に  
女子のおま○こが  
ある……………

もみくちやに  
されるてるのを  
いいことに  
じっくり観察しました

初めて見るおま○こは  
ピンク色で  
ヌメヌメしていて

不思議とグロイとは思  
わず、エロいという  
感情が湧きました

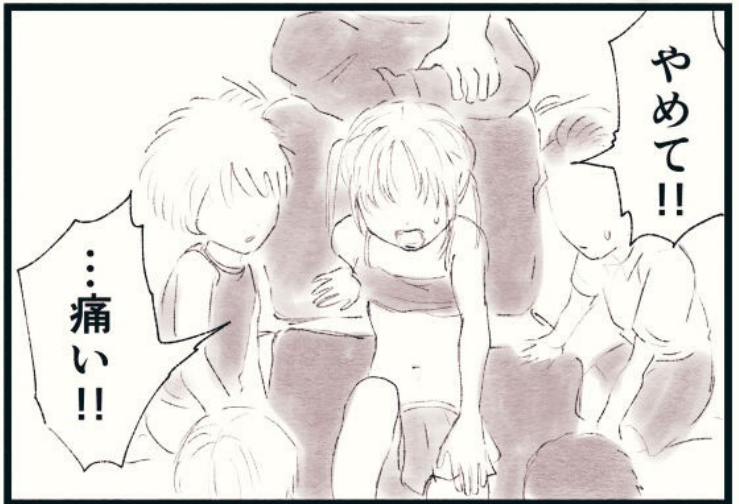
もはや殆ど全裸の状態でしたが、

くすぐりは続きました





しかし、  
終わりは突然  
やってきました



やめて!!

痛い!!



他の皆はなんのこともか  
わからないようでしたが  
僕だけはわかりました  
ヒートしたC君が  
Aちゃんのおま○こに  
指を挿入したのです  
彼の指は不自然に  
一本だけ濡れていました



Aちゃんは黙って衣服を  
正すと、僕ら全員を帰しました

この日以来、Aちゃんから  
くすぐりをお願いされることも  
無ければ、遊ぶこともありませんでした

あれから二十年



数年前  
SNSの友人かも？の  
一覧で偶然Aちゃんを  
見つけました

友人かも？



小川 七海  
(旧姓: 山田)

既に結婚してる  
ようだったし、  
連絡を取ることは  
ありませんでした

ただ

彼女は今も  
旦那さんにくすぐりプレイを  
求めているのかな…と

時々考えてしまいます

